

---

Nir Admirari

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

N i r A d m i r a r i

### 【Nコード】

N 7 4 8 8 A

### 【作者名】

並盛りライス

### 【あらすじ】

空を這う者達の物語。僚機の不可解な墜落。その裏にあるものは…スカイ・クロラの世界観で語る物語。

## プロローグ

ニル・アドミラリイ

砲撃がフォッサルタの残壕をこなごなに打ち砕いているあいだ、彼は地面に横たわり、汗を流して、ああイエス・キリストよここから逃がしてくれ、と祈った。

ねえイエス様どうか逃がしてください。

キリストよ、どうか、どうか、キリストよ。

殺されないようにしてくれさえすれば、なんでもおっしゃるとおりにいたします。

僕はあなたを信じますし、あなた以外にだいじなものなんかなにもないと、世界中のみんなに話します。

どうか、どうかイエス様。

砲撃は戦線を向こうほうへ動いていった。

われわれは残壕掘りの仕事にでかけた。

朝になると太陽が昇り、その日は、暑く、湿気が多く、陽気で、静かだった。

つぎの日の晩またメストレへ行った彼は、ヴィラ・ロッサでいっしょに二階にあがった女の子に、イエスのことを話さなかった。

彼は誰にも話さなかった。

（われらの時代にノヘミングウェイ）

ステンレスのシリンダーが不気味な音をたてた。

痛みがないから、飛行機乗りは空に上がってから異常を知る。

そして、空に上がってしまえば、既に手遅れなのだ。

翼の先から、細く、煙を吐いて静かに僚機の墜ちていく様を見た。

実際には、当然のように僕たちを地面に縛り付けておくための何か  
が其処にあった。

僕たちは、鳥ではない。鳥の手足でもなければ、くちばしでもない。  
僕らは鳥の目と耳と心臓であるから、僕らが失われれば鳥は飛ばない。  
い。

最初に考えたのは、自殺。次は居眠り。いくら考えても、匹蚊帳が  
死ぬ理由が見付からなかった。

実際には、理由なんてものは、ほんの少しのキツカケと後押しする  
何かがあれば十分だ。

生きていることが理由にもなるし、生き続けることが理由にもなる。

僕は死なない。もうそれだけで死にたいと思う理由にならないだろうか。

僕はまだ、死にたいと思ったことはない。そう思った時には、既に右手を引金に掛けている。

簡単に幕を降ろせるからこそ、簡単に幕を降ろさないことにしている。

トラブルを告げる信号は最後までなく、緩やかに惰性で前に進みながら炎を上げて僚機は墜ちた。

黒い煙がいつまでも不快な臭いを発していた。

決定的に違うのは、ヒツガヤが死んだこと。僕が死ななかったこと。

報告をするのはいつも、リーダーであるヒツガヤの役目だった。

よっぽどの成果やトラブルがない限り、呼ばれることはなかった。

「ってことは、トラブルの信号はなかった訳だね」

若い、よく通る声は、あきらかに不満そうだった。

三回、状況を説明したが。三回とも同じ質問をされた。

「はい、信号はなく。無線にも応答はありませんでした。」

「そうか…事後処理がすんだら、詳しく分かるだろうが、今は待機しててくれ」

報告が終わったのは、日が暮れてからだった。

うんざりするような質問討議の中で、何度も聞かれた事を仲間にも聞かれた。

食堂では、待っていたように本田と神弟波が僕を捕まえた。

「ヒツガヤは最後に何かいってなかったか？」

「いや、何も。」

「信号はなかったのか？無線も。」

「なかった。むしろ電源を切ったのはヒツガヤ自身だった。」

「そうか…」

冷えたビールを持ってテーブルに戻っていくホンダを見て。

こいつはどこまで知っているんだろう、と思った。

正確には、僕は嘘をついていた。報告の中では、無線はなかったと言ったが、ヒツガヤは最後に無線をよこした。

地面からそう遠くない位置だったように思う。

「…俺の私物はできるだけ早く処理しろ。そして、アサギリを信じるな。報告無用。最後に、ホンダの野郎に先に行く伝えてくれ。」

「了解。」

厄介な仕事。それも命に関わるような。

アサギリの部下になってから、そう早くない内に近くの街で殺人事件があった。

軍は関与を否定したが、ジープが一台なかったことを僕は知っていた。

ヒツガヤが何を知ったのかは分からない。

二段ベツトの上にあったはずの荷物は既になかった。たぶん分かっていたのだ。

僕が報告するより早くに、ヒツガヤが墜ちたことを…。

僕はベツトのマットを外した。

ヒツガヤのエロ本もなかった。

ヒツガヤが昨日、そこに寝ていたという痕跡はなかった。

そこには何もなかった。



## フェイント

「さあ、あがるぞ!」

とロケットは叫ぶと、体をかたく、まっすぐにしました。

「星よりもずっと高く、日よりもずっと高く、わしはあがるんだぞ。じっさい、うんと高くあがって」

しゅう!しゅう!しゅう!

ロケットはまっすぐ空中へ飛び上がりました。

「愉快だ!」

かれは叫びました、

「永久にこんなふうにあがっていくんだ。大成功を収めたぞ!」

しかし、誰ひとりロケットを見ませんでした。

(すばらしいロケットノオスカー・ワイルド 西岡孝次訳)

まだ遅くないうちに、僕はホンダを連れだして飲みに行った。

いつも行く、アップルパイの美味しい店でも良かったのだけれど、ホンダの知っている店に行くことになった。

「コーヒーとサンドイッチ」

「僕も同じの...」

店内は明るく騒がしいのに、中にいる客には老人が多い。

陽気な老人達の演奏はなかなかだし、サンドイッチも悪くなかった。

「ここは、宗教のに匂いがしないだろ？」

僕もちょうど、そう思ったので頷く。

「悪くない」

気に入ったという程度のことだけど、悪くなかった。

飲みに来たまでにはいいのだけど、ホンダがどこまで知っているのか分からない。

できれば、ホンダの方から話題に触れて欲しかった。

「お前の後ろ左から三番目の黒いジャケット」

小声で談笑するふりしながらホンダが言った。

僕も、ホンダの後ろを見た。

「入り口に女が一人…コーヒーの…赤いパーカー男が一人。」

「サンドイッチを食べ終わったらゆっくり外に出て解散。その後、撒いてからいつもの店へ。」

「コーヒーも悪くないな。」

気にするそぶりを全く見せないホンダに感心しながら、僕は時間をかけてサンドイッチを食べた。

その間、できるだけ面白い冗談と、コーヒーについて喋った。

コーヒーに関する冗談は、前にヒツガヤから聞いたヤツだが、面白くもなんともなかった。

たぶん、仲の良かったホンは聞いたことがあると思う。

店を出ると直ぐに、尾行が着いてきた。

ホンダの方に二人と僕の方に一人。

目的もなく辺りをブラブラするのは気が引けたが、この町にあるのは、酒場か宗教施設か、もしくは売春宿くらいだ。

撒くのは簡単だが、自然と離れたい。

そう思っていると、裏路地のある区画が近付いてきた。

軍服を着ている限り、変なやからに絡まれることはほとんどないが、決して治安がいいとは言えない。

低い銃声が一発か二発聞こえた。

いくらガラが悪い連中でも、昼間から銃は撃たない。  
撃つなら男の方が…。

尾行のクセに目立ってどうするのだろう。

左に折れて蔭から様子を窺うと、案の定男が銃を向けていた。

リーダーらしい男は腹を撃たれらしくぐったりしている。

尾行の男は腰を抜かしている。

あまりにも情けない尾行だ。地上戦を想定した訓練はおろか、銃を撃ったこともないのだろう。

外見を見ても、まだ若くて幼さすら漂っていた。

ガラスの悪い男の一人がナイフを出して尾行の男に飛びかかるようにしている。

銃はまだ地面を向いている。

僕は、非常識にも飛びだして、

「おい、動くなよ。」

と銃口を男に向けた。

どちらかというと、民間人を巻き込まないために。

二つの銃口を向けられた男は、急に勢いを失い。仲間を連れて退散した。

「大丈夫か。」

「ああ、ありがとう」

男は苦い虫をかみつぶしたような顔をしている。

「人を撃つたことは？」

「ある訳ないだろう」

「なぜ僕を尾行している？」

「気付いてたのか！？」

あまりにも、下手な尾行に気付かない訳がないだろう。

「口径が軍のものよりやや小さい。弾丸が少しとがっているいる。」

「なにがいたい！？」

やや、自暴自棄になりながら叫ぶ。

「仲間はどうした？」

「仲間？知らないな、俺は最初から一人だ。」

ということはホンダの方が本物か……。嘘ではなさそうだ。

「なんで僕を尾行している？」

「アンナ・アサノ。」

「最悪だな。俺も、お前もな……」

「……」

「アンナには潔白だと言えよ。じゃないと、依頼主の名前をしゃべった可哀想な探偵が酷い目にあう」

「……俺はしゃべったか？」

「ああ、しゃべった。」

「最悪だな。」

「実に……」

たぶん、ホンダの方に着いていたのが本物で、こっちはただの浮気調査か。

僕は、まんまと、この情けない探偵に騙されていたのだ。

## スリッパ

もし天使が空からやってきて

酒にあらざるものをくれたなら

その善意には感謝しても

その飲み物は流しに捨ててしまふにしかず

(G・K・チエスタトン／空飛ぶ居酒屋)

ホンダはきつちりと尾行を撒いていた。

僕が事情を話すと、やけに真面目な顔で同情してくれた。

冗談として笑ってくれた方がどんなにか良かっただろう。

「お互いに知っていることを全て話そう。」

ホンダが言う。

僕は、ヒツガヤの最後の無線のことを話したし、彼は例の夜の殺人事件の事をかなり詳しく知っていた。

殺されたのはドクターで、犯人は強盗だった。しかし、持っていた銃は軍の支給品で、金銭は何一つ盗まれていなかったという。

「ヒツガヤは知っていたんだ。だれがドクターを殺したのかを。」

「だから死んだ？」

「そうかもしれないし、違うかもしれない。」

話はそれだけだった。

真相なんて知りたくもないし、知ったら消されるのは今度は自分の方だろう。

僕は、部屋に戻ってヒツガヤのことを考えてみた。

彼は死にたがっていたのかみしれない。

そして、何か重大な秘密を隠す為に自ら堕ちたのだ。

その夜はやけに月が明るくてビールが回った。

ライトの人工的な灯りよりも本物の月の作り出した光は小さかった。

アサギリは何かを隠している。それともアサギリも知らないのだろうか。

地上に居ると、余計なことばかり考えてしまう。

久しぶりに、空を飛ぶ夢を見たい。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7488a/>

---

Nir Admirari

2010年10月12日06時27分発行